

名和会長のシリーズインタビュー<<この人にきく>>⑦

大学生協関西書籍事業部 寺尾 正俊さん

「大学生協の書籍事業」

寺尾さんは大学生協書籍部の歴史そのものである。京都地域の書籍の歴史を聞きたくてインタビューをお願いした。気さくに応じていただき感謝している。寺尾さんとの話題は短い時間に係わらず、再販闘争・読書推進運動さらに現代の課題にまで及んだ。寺尾さんの熱い想いが伝わってくるようである。今後も後輩に大学生協の事業を語っていただきたいと思っている。

お話し 寺尾 正俊氏 (T と略)

聞き手 名和又介先生 (京都事業連合理事長、京滋・奈良ブロック会長、N と略)

京大生協からスタート

N 先日は、「京都の大学生協史編纂委員会」でのご報告ありがとうございました。とてもいい参考になりました。まず、寺尾さんはどこのご出身ですか。

T 生まれ育ったのは、北海道の札幌。生まれたのは石狩という小さな漁村です。半農半漁の町で、私の生まれたころは2千人ぐらい、いまは5万人になっているそうです。札幌は、冬季オリンピックの時に街がいつぺんに整備されました。ここで高校卒業までいました。親父と一緒にいるのが厭になって出てきました。逃げる口実はいろいろつくって・・・。

N ご家族は？

T 兄が40歳、私が35歳のときに亡くなり、そのあと、母親、父親も亡くなりました。いま、姉が千葉に、妹が札幌にいます。

N まず最初札幌を出て東京へいかれたのですか。

T そう思うでしょう。それが、東京が厭で。最初は金沢に行く予定でした。

N なぜ金沢へ？

T 家を飛び出た理由は、美術関係の学校へ行きたかったのですが、金沢美術工芸大学か京都美術大学かで、両方受けたのですが、3次の試験に通りませんでした。

N そして、どうされたのですか。



T そのまま京都でごろごろしていたら、朝、新聞に「京都大学生協でアルバイト募集」という記事を見つけた。歩いて5分の近くだったし、ぎりぎりまで寝ていられるし・・・。

N 京都大学の生協にお入りになって、最初、どういうお仕事でしたか？

T いまはもうないのですが、最初、京大吉田パンショップというところでした。食堂の一角に、パン、お弁当を売るコーナーがあり、おばちゃん方と一緒に仕事していました。そのあと購買部で家具、電化製品などを担当しました。その頃、京大セブンショップというスポーツ用品専門のお店が出来ると言うので、そこへ行けるかと期待していたら・・・

N スポーツ関係というのは、若者の憧れの職場だった？

T その前、アルバイト時代に、正規職員が仕事しないのに、ナンデ俺より給料好いんだって思いながら、アルバイト・パートの労働組合を作りました。当時の専務に「そんなごちゃごちゃ言わずに、正規職員になったら！」と言われて正規職員になりました。それで、スポーツ部門へ行くのかとおもったら、書籍部で欠員が出たからと言われ書籍部へ行くことになりました。「俺、本はきらいだから！」で言ったんですが・・・。

外販でつちかった人間関係

N その頃の書籍部はどういう感じでしたか？

T 私が入った時は、時計台の地下に三角形の書籍売り場があった。吉田と二つしかお店がありませんでした。最初は配達だけを担当させられました。学内を知れ、ということだったと思います。

N 京都大学は広いから、配達だけとはいえ、大変だったのでは？

T 丸2年間は、配達だけでした。

N 専務さんは？

T 和田専務の頃でした。2年間、外販部を担当したことが後々とても生きてきました。先生方の顔がわかるし、どこにどんな本があるかもわかるし、それはすごく助かりました。

N なるほど、2年間でネットワークができたのですね。

T 最初は厭で厭で仕方なかった。朝から伝票切って、昼から配達というのを毎日繰り返すのです。目をつぶっていても学内が歩けました。何歩行って、何歩で階段だと。

N すごい財産じゃないですか。

T あとあと、すごく助かりましたねえ。

N この先生はこういう傾向だ、こういう本をよんでいるとか、全部分かるわけでしょう。

T 同志社大学などでもそうでしょうが、大きな付属図書館だけでなく、学部学科ごとに図書室、資料室をもって、私の頃に30数箇所ありました。いまは45、46箇所ぐらい。研究室もあるけど、そういう図書室でも雑誌、本を置いているなあと分かり、それが後々の仕事に役立ちました。

N そういう知識・情報を持つだけでもすごいですね。

T 一日に100箇所以上回るんです。

N 予算もついていますし、買う本の量も生半可じゃないでしょう。

T その頃は、院生の方がものすごく本を買っていた。本を買うためにアルバイトをして。ひと月に5万、10万買う人がいました。仲良くさせていただいた院生が講師、助教授になられて。

N その時の関係が続いていくのですね。面白いですね。

T 親しくさせていただいた先生が助手になられると、お祝い兼ねて飲みに行きましょう、となる。酒呑む、口実ですね。

N いまは、どこの大学も教員と生協職員さんの繋がりがなくなっているのじゃないかなあ。あったとしても、本屋さんの、ワン・オブ・ゼムになっている。

T 先日の大学生協研究会で出した「年表」の下の方に書いたのですが、こういう本なら、あの先生に売ってみようとか、先生ご自身の考えを聞いて、売ることが出来たのです。

N その頃、事業連合ではどうだったのですか。

T 事業連合には、書籍担当者がいなかったと思います。各単協の店長が京都全体の相談や取りまとめ役をやっていました。

N 店長がリーダー的な役割をはたしていたのですね。

T 京大店長の仕事として、関西地連エリアが活動の範囲でした。

N それは、やりがいのある仕事でしたね。

T 他の店を見ることができて、いろんな店の状況を知っているということは強みでした。京大生協の店長を4年ぐらい経験して、事業連合へ移籍しました。

書籍再販闘争の時代

N その頃ですか、再販闘争問題は？（組合員以外に割引をしてはいけない、など）

T 書店組合の人が、生協書籍部の売り場に立って、非組合員にも売っているのじゃないかと、監視しているというような状況でした。

N 寺尾さんは、先日の研究会でのレジュメにもはっきり書かれていましたね、「京都の大学生協書籍事業は、市中書店の大学内の売り上げを奪い取る時代でもあった」と。なるほど！と僕は思いました。このような指摘で初めて認識しましたし、このような視点で総括することも必要ですね。

T 若い職員からは、年表を見てもよく分からないから、教えてくれと言われるのです。再販闘争については、横浜国立大学では裁判になり、結果的に「再販三原則」が業界と生協の間ではっきりしました。

N 東販・日販との取引が始まる？

T 東販（現トーハン）が大学生協全国取次に加わったのは64年ですが、でもまだすべての生協で取引ができた訳ではなかった。京都でも卸さないこともあり、生協の車ではなく、レンタカーで目隠しして入荷し、エレベータの中で伝票を切ったりしたこともありました。荷止めはありませんでしたが。京都という狭い地域で、東販も日販もいろいろあるという

のはなかなか難しかった。

N 80年代に入って、東販が一番の顧客になりますか。

T 4, 5番目でしたね。東販は大手出版社が大株主で系列化しているのに対し、日販は学術・専門書店が株主でした。そういう状況もありました。

専門書復刊事業の頃

N 専門書の復刊事業は、大学生協が大きな力量をつけてきた時期ですね？

T 本がない、手に入らないと先生、学生の両方から苦情があがってきていました。全国からそういう声を集めて復刊事業をすすめてきた。しかし、著者の先生の了解を得たり、亡くなっている先生はどうするかなど、その了解がなかなかとれなかったり、実は大変な仕事でした。

N 大学生協らしい事業をされたなあと思いますね。組合員の声聞いて、すすめるというね。しかし、赤字がでるといふこともあったでしょう。



T すべてが売り切れる訳じゃない。大学生協として何割か買取らなければならないために、各生協のなかで不良在庫として残ったものもある。関西エリアだと、最終は京大に集めて、もう一度売ろうとかか苦労も続きました。

N 何年まで続きましたか。

T 90年ぐらいまで続きました。事業をはじめたときの店長や職員がいなくなると、熱意が冷めてくる。大事な仕事だと思

う者がいなくなると、「こんな売れないものをなんで抱えているんだ」という考えがでてくる。

N 慈善事業じゃないんだよという意見もでてくるでしょうね。大学生協らしい事業だし、キャンパス内の教員、学生に感謝されたと思いますけどね。

大学生協が力量をつけた

N 全国の読書交流会では、一橋大学の場合、専門書を連帯で出してほしいとか、京都府医大では、新入生のためのリストづくりをしたりしたとか、大変な作業だったと思います。

T 医学部は、全国的にそうですが、指定教科書がなく、先生からも推薦もなにもなく、先輩から後輩に代々、解剖学ならこれ、これが好いと、伝えられてきた。OBがそういうリストを作っていた。そこに生協の活動と一緒にあって、そういう方の協力を得ながら、お薦めの図書をまとめてきた。そういう活動が医学部だけでなく、他の学部でも広まればよかった。

N 埼玉大かどこかが、卒業生が在學生にすすめる本という面白いことをしていました。

T 院生が学部生に薦める本だとか、そういう取り組みもやりました。実際に使って勉強した声なので、よく売れました。生協や先生が言うのとは違って。

N 一番売れないのは、先生が薦める本ですね。教師だから、よく分かります。大学生協が力量をつけて最初にやったことは、全国連合会の岡安専務理事か高橋専務理事の頃、大学の理事長先生を読んでシンポジウムをしましたね。そういう発想で、先生に推薦してもらって読書のシステムを作ろうということを考えられたが、うまくいかなかったね。

T 先生の想いは分かるんだけど、学生との間に距離があるんですね。その頃、全国の大学生協で、「先生が薦める本」という企画が進んだ。なかなか、売れなかったですね。

N そうだろうと思います。どうしても先生というのは、学生にこれを読んでほしいという発想をします。でも学生は読みたくない本だったりして。ひとつの自然な流れで、大学の先生、先輩と身近なところに進んできて、大学生協が知恵と力量をつけてきた。専門書や流通に載らない本を販売したり、面白いことをしている。80年代の半ばが大学生協の書籍部がもっとも活発に動き、力量をお持ちになった時期とみているんですが、どうでしょう？

T 私自身、大学生協の仕事していて、80年代が一番華やかに活動していたと思います。

N 全国の読書交流会そのものをみても、教員、大学院生、大学生協の職員さん、大学の職員さんもふくめ、これだけ大規模な交流会を持ったのは日本の中で珍しいと思います。一大学でできることではないし、国公立大学には学長の会議があつたりするけど文科省はそういうことをしませんしね。唯一大学生協だけですね。そのあたりを高く評価してもいいと思うのですが、いかがでしょうね？

T そうですね、とは立場上いいにくいなあ。

リストラ、「定番」書籍の提案以後

N その80年代、一番苦勞されたのはどういうことですか。

T 80年代の前半は京大店長をしていて、なかばから事業連合にかわり、もっと仕入条件をよくしようと動いた。

N 仕入れ条件を良くしようとすると、効率的な人員の配置になりますね。寺尾さんには、当時のことを反省するような報告もありましたが・・・。

T 店長という立場もあつたけど、京大時代には西山専務と喧嘩したりしました。西山さんは関西地連、全国の理事もしていて、全国で決まったことを実行するという立場ですから。

N 現場にいれば軋轢や葛藤がありますね。大学生協が大きな組織になってきて、大手取次店と同じような行動パターンになってきますね。その頃、書籍部ではIT化が進んで、書籍関係のメンバーを増やさないと、逆に言ったらリストラが進んだりもしましたね。

T このままだとじり貧だという事態もあつて、私が事業連合から連合会へ行って仕事するのですが、リストラ以降考えたのは、お店の人が減っても、この以上レベルを下げないた

めにも、全国の「定番」という仕組みを提案する。どんな現場の力量でも、専門書をこれだけ置いて出来る。それが理想としてありました。ところが、楽になって、さらに人員削減がすすんでしまった。楽に仕事が出来ようになった分、もっと先生方を訪問したりすればよかったのに、と思います。好いことしたのか、悪いことしたのか。

N それが、日本全国の流れでしょうから。日本全体で書籍販売量が減るという時代。そして、それは今も進行形で、この先落ち着く先があるのかどうか、誰も分からない。そういう状況のなかで、奮闘されているのですが、寺尾さん自身、どういうふうにあったらいいなあと思いますか。

T 書籍に限りませんが、生協が出来た時の原点を考えると、大学の中には、学生だけでなく、先生、職員、看護婦さんいろいろな構成員がいる。もう一度、何ができるのか考えないと。単純に先生のところへ行け、というだけでなく、売上の話だけでなく。

N 結局は人間関係ですね。大学内での人間関係の再構築。大学生協がどういう人間関係の再構築をできるか、ですね。

T 大学の周りには古本屋さんがたくさんあって、古本屋さんの親父さんからいろんな話を聞いた。ところが、「寺尾君、最近、先生がそもそも来なくなったよ」という。昔なら置いておけば買ってもらえたが、今は置いても買ってくれないから、全部東京神田の古本市場へ送っているというんです。結局、京都のお店には好い本がなくなっていく、悪循環だと。

N 負のスパイラルですね。学生さんだけじゃなく、先生自身がね。昔の先生というのは、専門が広く、どんと買ってくれたけど、今の先生は専門が狭い。

T 学術雑誌が電子化されて以降、パソコンでは、限られた範囲しか検索できない。参考文献の範囲が狭くなってきている。自分の専門以外の本が目に入らなくなってきている、と、そういう話を聞きました。

N 1991年に大学大綱化の名前で教養課程がなくなった。いわゆる教養課程の先生は、概説的で幅が広い。専門の先生は狭いところで勝負している。大学の教養部がなくなってほっとするという声も聞こえるけれども、逆に相当大切なものを失ったのではないかと思います。教養課程がなくなったというだけでなく、大学そのものが専門学校になってしまった。おそらく、寺尾さんは、専門学校化した大学ということをおっしゃっているんでしょう。

T 業界の勉強会で報告したとき、91年の大教審が変わったあたり、大学院生の倍増化や教養課程がなくなった時から、下がり始めたのはその時からですよと報告した。

N 制度の崩壊とともにバブルがはじけ、そういう現象がひろがりました。読書量の減少なども、そういう反省で見る必要があるかもしれません。

T 僕が言える立場じゃないけど。



N いえ、さすがに読書・読書界のことをよく知っておられると感心します。

T 単純に学生の読書量が落ちたというだけじゃないはずなのです。

N 書籍部の歴史そのものの寺尾さんの言葉だから、大きな意味があると思います。寺尾さんの体験を是非まとめていただきたいですね。今回はお忙しい中、インタビューに応じていただき、ありがとうございました。

(2010年11月19日インタビュー実施)